

19世紀末中国の開港場間貿易結合度

小 瀬 一

はじめに

中国近代史研究において統計を使って数字に語らせる手法が、普通に行われるようになって久しい。実際、統計数字を使つての精緻な研究が刊行されつつあることに、マイクロフィルム of 数字を拾った世代としては隔世の感を禁じえない。特に中国近代経済史については、海関（税関）統計の存在が大きい。税関の統計である以上、海関統計は中国の対外貿易を論じる糧とされたが、同時にこの膨大な数値情報は、中国国内経済の変化を追う手がかりともなるものである。

本稿では、あらためてこの海関資料を使って、近代中国が世界市場と出合う中でいかなる変化を見せたのか。開港場を中心とする経済から考えようとするものである。

I. 清末の中国地域経済

これまでも中国を単一の経済体としてみるのではなく、地域経済という観点を入れて理解しようとする試みが続けられてきた¹⁾。しかし、論者それぞれが問題とする地域概念が多様であるために、地域経済の具体的な像が共有されているとは言えない。

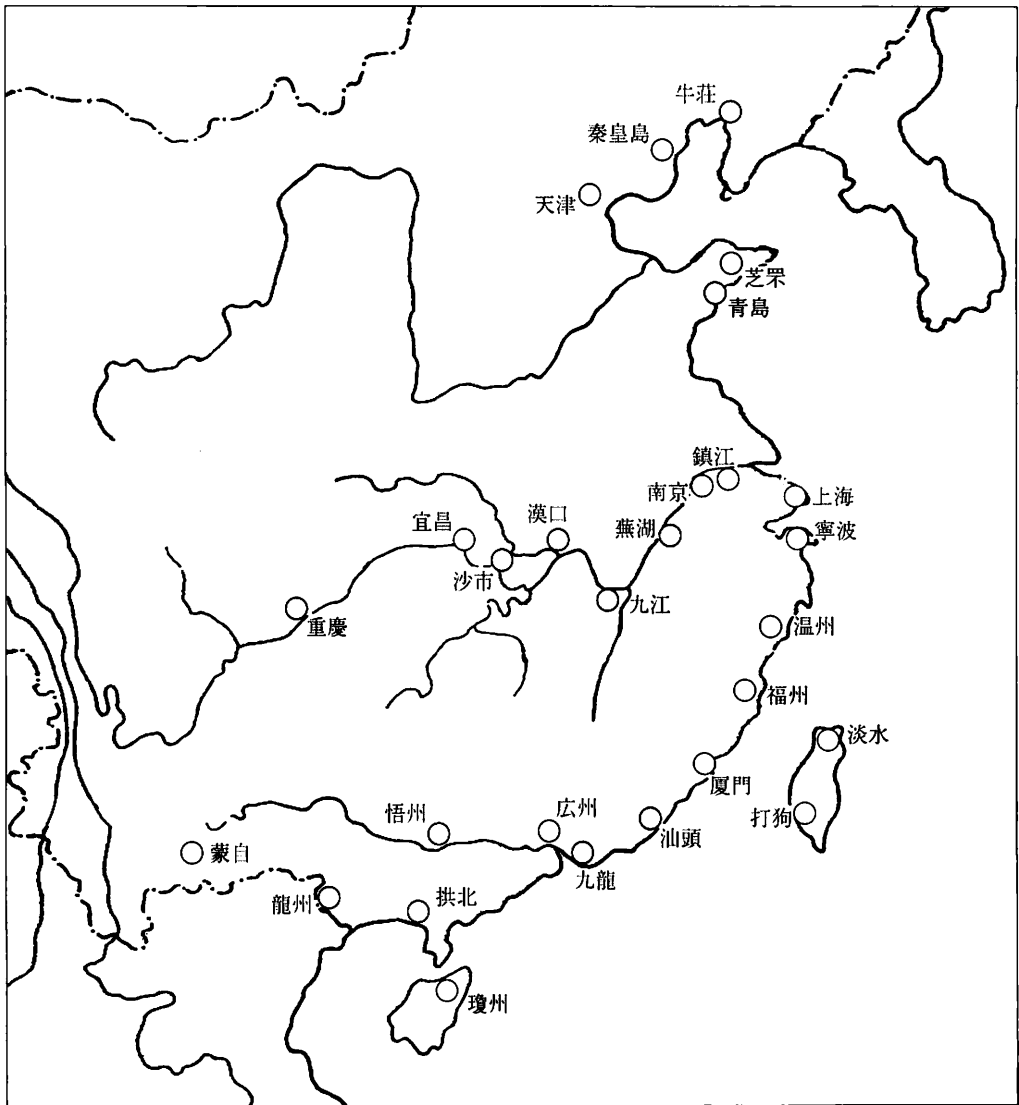
黒田明伸氏は「開港場経済圏」という印象的な言葉を提起されている。「開港場経済圏」とは中国の開港後、1890年代になって対外貿易の質が変化するとともに開港場を中心として成立するものである。対外貿易の変化とは、ひとつにはその貿易額がそれ以前と比べて急増することであるが、同時に貿易品目の多様化がみられたことをいう。輸出においてはそれまでの茶・生糸が中心であった状況から他の一次産品を含む多様化が見られる。このことは中国経済が開港場を介してより強く世界市場と結びついた結果と理解される。その結果、開港場を中心にいくつかの「開港場経済圏」が成立したとされる²⁾。

それをうけて最近の木越義則氏の議論では、① 沿海市場圏の時代（開港から1870年代）から② 開港場市場圏の時代（1880年代から20世紀初頭）そして③ 全国市場圏形成の時代（両大戦

1) 「地域経済」という概念を明確にして中国経済を検討した研究は多数ある。そのうち明清代と近代との関係を特に意識したものとして、山本進『清代の市場構造と経済政策』（東方書店 2009年）がある。なお山本氏の議論については同著『清代の市場構造と経済政策』（名古屋大学出版会 2002年）、『清代社会経済史』（創成社 2002年）もあわせて参照されたい。

2) 黒田明伸『中華帝国の構造と世界経済』（名古屋大学出版会 1994年）

図1 19世紀末中国の開港場



間期) つづいて ④ 全国市場圏分裂の時代 (戦時・戦後初期) と一時代を画するものを使っている³⁾。本稿であつかう時期は、一次産品輸出を通じて農村と世界経済の結び付きが強くなると理解された時期と重なる。

このように概観すると、19世紀から20世紀にかけての中国経済は、開港場経済圏の成立がひとつの注目点であり、それをどのように評価するかも問題のようである。黒田氏においては「開港場経済圏」の登場は開港後の状況を表現する語であったが、木越氏の「開港場経済圏」はその後の「全国市場圏の形成」そして「分裂」へと続く流れの中に位置づけられ、その画期性がきわだつこととなった。

3) 木越義則『近代中国と広域市場圏』(京都大学出版会 2012年)

かつて筆者は、開港後の中国経済の変化について、流通を舞台に検討したことがあった。従来は外国商品の流入がただちに国内生産の変化（衰退）と理解されていたのに対し、流通という「踊り場」を設定することで、単純な「西洋の衝撃」論とは距離をおくものである。経済の規模が拡大する中で、外国商品と国内産品の流通は対立ではなく（一方が他方を分断するということではなく）、補完的な関係が生じていたことを指摘した。その観点からすると、「開港場経済圏」の成立を、それまでの流通関係の存在と断絶的に捉えることには疑問がある⁴⁾。

そこで本稿では、まず開港場を中心にした経済圏にたちかえって検討を加えようとするものである。開港場はもちろん対外貿易の開始と密接な関係があるが、同時に在来流通のありようを意識して配置されたという側面もある。ひとつ問題となるのは、数多くある開港場の機能を均一のものとして受け止めることの是非である。たとえば物資集散の中心地たる上海と広東省内の一港である瓊州とを同一の性格をもつ港として扱うことは困難であろう。それを分かつのは規模の大小だけでなく、それぞれがもつ役割の質的なちがいである。

19世紀末において外国商品はそれぞれの開港場に等しく持ち込まれるのではなく、中国中北部においては上海が、南部においては香港が集散地となっていた。それは開港場間において階層性が存在することを予想させる。またこの局面で外国商品は、上海や香港が国内各地と取引をする際のいわば“手駒”となっていたのである。またこれらの取引は中国商人の流通システムに乗って展開したことも意識しておいてよからう⁵⁾。以上のような見取り図をふまえて、今回は開港場間の貿易結合度を算出しつつ、近代中国経済に見られた開港場の経済について考えてゆきたい。

Ⅱ．開港場間貿易結合度

海関統計は本来的に対外貿易をあつかうものであるが、19世紀刊行の統計には国内貿易の動向を示すデータが多く記載されている。港間の貿易額もその一つであり、これを利用して中国の港間貿易結合度（輸出）を出すことができる。ただし、港間の取引額が明示されているのは1904年の統計が下限となっており、結合度の算出も同年までがひとつの区切りとなる。

そもそも貿易結合度は、二国間の取引の緊密度が見られる指標で、 $(a \text{ 国から } b \text{ 国への輸出額}) / (a \text{ 国からの総輸出})$ を分子とし $(b \text{ 国向けの総輸出}) / (\text{全世界の総輸出})$ を分母として得られる数値である。その結果得られた数値が「1」以上であれば、この二国間の取引が標準的な額よりも多く、関係が強いと判断することができる。これを中国内の開港場間に適用して、近代中国の地域経済を考えようというのが本稿の着眼である。なお筆者は、以前に実数で二港間の取引状況を示したことがある。その作業とくらべて、今回のものは港間関係を比較してみることが容易で

4) やがて各地の港で直接貿易が増えて上海の中継貿易港としての役割が減じる局面が見られる。しかし、それは20世紀以降のことであって「開港場経済圏」の成立と同義ではない。この開港場間の関係に変化にあたっては、モノだけではなくそれを支えた商人・決済の問題をあわせて考える必要がある。拙稿「中国における二十世紀初頭の「恐慌」について」（『一橋論叢』103-2 1990年）参照。

5) 拙稿「19世紀末、中国開港場間流通の構造」（『社会経済史学』54-5 1989年）参照。

ある。

なお今回の作業では特に以下の取り扱いを行った。

1) 香港の扱い

香港はイギリスに譲られて以降、イギリスの対中国貿易の拠点であるだけでなく、アジアの中継港としても発展を見せる。それと同時に、中国内の貿易にあたっても重要な役割を果たしていた。本作業では香港をむしろ中国内の港として扱う。しかしながら、香港には1910年代にいたるまで貿易統計は整備されておらず、今回の作業をすすめるにおいて問題となった。そこで中国側諸港の統計から香港との貿易を抜き出し、各港における香港からの輸入を香港からの輸出として扱うことで（輸入はその逆）、結合度を求めるための数値とした。

2) 外国産品と国内産品

従来の研究では外国商品輸入と国内生産との関係は相反するものととらえられがちであった。そのため対外貿易の伸長は、国内生産さらには国内交易の衰退を意味していた。しかし、国内生産に変化があったとしても、それが国内交易の衰退を意味するというのは短絡的な見方である。対外輸出で獲得された購買力は、国内商品の消費にもむかい、それが新たな国内交易の展開にもつながったのである。そこで、これは以前の論考でも適用した理解であるが、外国商品の中国内取引も開港場間の重要な構成要素として算入した。特に上海にとって外国商品は国内各港との取引において、自身が提供する重要な交易品であった。

ただここでも問題となるのは対香港貿易である。1892年までの海関統計では、各港の貿易表に「香港経由の国内産品移入」が一つの項目として明示されており、中国産品を扱う香港の姿を知ることができるのであるが、それ以降は他の外国と同様の扱いとなって、香港を含めた国内産品交易を基礎とした貿易結合度の算出はできなくなる。

19世紀の中国対外貿易を振り返ってみると、1890年代に一つの変化がある。それは輸出入額の拡大と貿易品目の多様化である。今回は1876年と1896年とをとりあげたが、この二つの表は19世紀末の貿易動向の変化をある程度反映するものである。その一方で日清戦争の結果台湾が失われたことで、開港場の配置にも変化が来している。さらに、新しく開港場となった港が増えたという意味でも、以前との比較には注意しておく必要がある。なお結合度の算出は1904年についても可能である。しかし、同年は日露戦争の影響を考慮する必要がある。

表1-1は、以上のような前提をふまえて算出した1876年の結合度である。ここからみられることは、次のことである。

- ① 牛荘、芝罘からみて、南部の厦門、汕頭との結合度が高い。これは従来から明らかとなっている大豆粕の南部への輸出が反映したものである。この大豆粕は南部でのサトウキビ栽培の肥料として使われたとされる。
- ② 米の扱いが多い港としては、鎮江、上海があったが、この表では鎮江と広州との結合度が

表 1-1 1876年結合度（輸出）

輸出側→	牛莊	天津	芝罘	漢口	九江	鎮江	上海	寧波	福州	淡水	打狗	廈門	汕頭	広州	瓊州	香港
牛 莊	—	0.3	2.9	—	—	—	2.0	—	2.4	—	1.5	2.4	1.3	0.4	—	0.3
天 津	0.1	—	0.3	0.1	—	0.1	2.1	—	1.5	—	0.6	0.7	1.0	0.7	—	0.3
芝 罘	0.4	0.2	—	—	—	—	1.9	—	0.8	—	20.2	0.4	2.8	0.4	—	0.3
漢 口	—	—	—	—	3.4	0.8	2.0	0.1	—	—	—	—	—	0.6	—	—
九 江	—	—	—	0.1	—	0.5	2.6	0.1	—	—	—	—	—	—	—	—
鎮 江	—	—	—	1.4	0.2	—	2.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—
上 海	0.7	2.5	2.3	3.7	2.6	3.5	—	4.0	2.1	0.1	0.7	0.6	2.7	0.2	0.3	0.6
寧 波	—	0.5	—	0.2	—	—	1.7	—	—	—	0.7	0.1	—	0.4	—	1.3
福 州	0.5	1.0	0.2	—	—	—	0.5	0.1	—	—	0.4	0.8	0.1	—	—	3.6
淡 水	—	—	—	—	—	—	—	—	0.1	—	0.7	23.5	0.2	—	—	2.8
打 狗	—	—	—	—	—	—	—	—	0.4	0.3	—	30.4	—	—	—	2.3
廈 門	3.1	0.2	2.4	—	—	—	0.4	0.1	1.3	19.8	1.2	—	0.1	—	—	2.8
汕 頭	4.3	0.5	1.9	—	—	—	0.5	—	0.1	0.1	—	0.2	—	—	0.7	3.2
広 州	0.8	2.7	—	—	—	0.7	1.1	0.2	—	—	—	—	—	—	—	2.6
瓊 州	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1.0	—	—	4.6
香 港	2.4	1.0	0.9	—	—	—	0.4	0.1	1.6	0.8	1.2	2.0	1.0	6.7	7.6	—

注目される。

- ③ 茶の扱いが多い港としては、漢口、九江、上海、福州があったが、九江から漢口、上海への数値が注目される。
- ④ 上海からみて、多くの港との結合度が高いが、相手の港からみても数値が高いのは天津、芝罘、漢口、九江、鎮江、寧波、福州、汕頭である。
- ⑤ 香港からみて、結合度の高い港は寧波以南の港に限られる。その一方で香港との結合度が高い港としては、南部諸港のほか牛莊があげられる。
- ⑥ 台湾については対岸にあたる廈門との関係が深いながら、二つの港で貿易相手が対照的である。

次に表 1-2 は1896年の貿易結合度をしめしている。表 1-1 との比較では

- ① 牛莊、芝罘と南部との関係が強いことは変わらないが、その数値には低下がみられる。
- ② 米の扱いが多い港として蕪湖が登場するが、鎮江とならんで南部諸港との関係が強い。
- ③ 茶の扱いが多い九江
- ④ 上海からみて、結合度が高いのは中国北部・中部へと傾斜しつつあり、特に近郊の港との関係が強まっている。
- ⑤ 香港からみて、依然として南部諸港との関係が強いのであるが、その数値は減少傾向にある。
- ⑥ 新しく長江上流域で重慶、宜昌が登場するが、この二つの港と漢口との間には、重慶 ⇄ 宜昌 ⇄ 漢口という関係が成立している。
- ⑦ 新しく登場した港（沙市、蘇州、杭州など）は、取引相手が限られる傾向がある。

いずれの年においても上海、香港は、それぞれ中北部、南部に立地する諸港との間で高い結合

表 1-2 1896年結合度（輸出）

	牛莊	天津	芝罘	重慶	宜昌	沙市	漢口	九江	蕪湖	鎮江	上海	蘇州	寧波	杭州	温州	福州	廈門	汕頭	杭州	瓊州	拱北	蒙自	香港
牛莊	—	0.5	0.4	—	—	—	—	—	—	—	2.2	—	0.3	—	0.1	0.4	5.2	0.9	0.2	—	—	—	0.7
天津	—	—	—	—	—	—	1.3	0.4	—	0.2	2.0	—	0.1	—	0.6	3.3	1.3	0.7	0.4	—	—	—	0.3
芝罘	0.4	0.4	—	—	—	—	0.3	—	—	—	2.0	—	0.1	—	—	0.2	1.6	1.9	0.2	—	—	—	0.8
重慶	—	—	—	—	26.5	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.2	—	—	—	—
宜昌	—	—	—	24.3	—	—	5.0	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
沙市	—	—	—	—	—	—	7.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1.3	—	—	—	—
漢口	—	0.1	—	—	3.9	9.4	—	3.9	1.5	0.6	1.8	—	0.5	—	—	0.3	—	1.7	0.2	—	—	—	—
九江	—	—	—	—	—	—	0.1	—	0.1	0.1	2.5	—	0.6	—	—	—	—	0.2	0.1	—	—	—	—
蕪湖	—	—	—	—	—	—	1.1	1.1	—	0.4	2.2	—	0.2	—	—	—	—	0.8	—	—	—	—	—
鎮江	0.2	—	—	—	—	—	1.4	1.7	0.1	—	1.8	—	0.2	—	—	—	0.2	2.2	—	—	—	—	0.2
上海	0.9	3.5	2.3	—	—	—	2.2	1.8	0.5	1.5	—	4.3	3.7	4.3	3.4	0.9	0.9	1.5	0.3	—	—	—	1.7
蘇州	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1.9	—	—	—	—	—	—	—	1.4	—	—	—	—
寧波	—	0.2	0.1	—	—	—	0.5	—	—	—	2.5	—	—	—	1.5	0.1	1.4	—	0.3	—	—	—	0.1
杭州	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.6	—	—	—	—	—	—	—	1.9	—	—	—	—
温州	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.3	—	2.3	—	—	—	0.7	—	0.2	—	—	—	0.1
福州	0.1	0.3	0.1	—	—	—	—	—	—	—	0.9	—	0.2	—	0.1	—	5.9	1.0	—	—	—	—	3.1
廈門	5.1	0.3	3.1	—	—	—	—	—	—	0.3	0.5	—	0.6	—	2.3	2.4	—	0.2	—	—	—	—	3.1
汕頭	5.9	0.5	4.3	—	—	—	0.1	—	4.7	1.2	0.4	—	—	—	—	0.2	0.4	—	—	—	—	—	2.3
杭州	3.7	0.9	0.5	—	—	—	—	—	6.5	2.6	0.6	—	0.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.3
瓊州	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.2	—	5.1
拱北	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2.6	—	—	5.0
蒙自	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	5.1
香港	0.6	0.5	1.1	—	—	—	—	—	—	3.2	0.5	—	—	—	0.1	2.6	2.2	1.2	9.2	10.8	11.0	11.0	—

度を持っている。また牛莊、芝罘といった北部諸港のような特産物を輸出する港では、特定の港との関係が強くでている。また北部の天津と中部に立地する漢口は、周囲の複数の港に対して結合度が高く内陸における拠点として機能していることを示している。

ところで開港場と言っても、その立地、環境によってその機能が異なる。表 2-1 では開港場からの国内港向けの輸出額（外国商品と国内産品の合計）をしめしている。輸出港として上海と香港が抜きんでているが、他の港との比較では外国商品の扱いが圧倒的に多くなっている。国内産品の扱いだけでみると、やはり上海の優位は変わらないのであるが、香港にかわって漢口、広州といった港が上位にあがってくる。この序列は1891年についても変わらない。

次に表 2-2 では、それらの「輸出先」を並べたものである。ここで「輸出先」というのは、当該港について国内諸港からの輸入を意味しており、たとえば1876年の上海は3700万海関両あまりを国内諸港から輸入したことを示している。上海、香港は中国からの対外貿易の中継港という役割ももったが、この表では国内産品の輸入量の多さとして表現されている。その他の諸港では、外国商品、国内産品の輸入が並行する傾向が強い。

この期間を通じて、外国商品、国内産品の移動はともに増加し、外国商品の増加の方が顕著にはみえる。しかし、これには新しく設置された開港場の影響、上海→漢口→宜昌→重慶へと流れる外国商品の数え方の問題も考えられ、単純に外国商品の方が目立って増えたとは言えない。

表 2-1 港別対国内取引額（輸出額）

（単位：海関両）

1876年	(外国+国内)	外国商品	国内産品	1891年	(外国+国内)	外国商品	国内産品
上 海	59,610,201	33,379,018	26,231,183	上 海	99,213,725	57,367,534	41,846,191
香 港	32,644,619	27,373,681	5,270,938	香 港	61,749,371	54,571,680	7,177,691
漢 口	15,892,419	118,445	15,773,974	漢 口	24,036,408	3,100,266	20,936,142
広 州	15,501,953	291,295	15,210,658	広 州	18,562,428	112,008	18,450,420
九 江	9,003,684	33,115	8,970,569	九 江	8,269,930	0	8,269,930
寧 波	5,339,465	302,712	5,036,753	牛 莊	7,615,199	10,729	7,604,470
汕 頭	4,360,873	22,354	4,338,519	汕 頭	7,530,647	34,151	7,496,496
芝 罘	2,910,892	236,506	2,674,386	天 津	5,526,107	21,008	5,505,099
牛 莊	2,725,714	97,371	2,628,343	蕪 湖	5,286,699	8,769	5,277,930
厦 門	2,700,795	1,186,764	1,514,031	寧 波	5,038,608	33,881	5,004,727
天 津	1,693,055	142,933	1,550,122	芝 罘	4,258,713	61,512	4,197,201
福 州	1,448,986	97,073	1,351,913	宜 昌	4,079,442	1,358,274	2,721,168
鎮 江	1,292,498	184,435	1,108,063	淡 水	3,153,246	50,047	3,103,199
淡 水	1,215,232	4,088	1,211,144	福 州	2,565,150	69,993	2,495,157
打 狗	780,835	18,489	762,346	厦 門	2,325,845	346,585	1,979,260
瓊 州	316,896	577	316,319	鎮 江	1,724,572	20,792	1,703,780
合 計	157,438,117	63,488,856	93,949,261	重 慶	1,389,683	0	1,389,683
				打 狗	1,037,392	56,425	980,967
				瓊 州	931,160	1,197	929,963
				拱 北	808,996	218	808,778
				温 州	167,107	2,057	165,050
				合 計	265,270,428	117,227,126	148,043,302

資料：海関統計

また両表での序列を比較してみると、大きく動く港がある。たとえば天津は1876年で輸出港としては11位であるが、輸入港としては4位にある。逆に九江はそれぞれ5位と13位にある。このことは天津の発展は消費に支えられ、九江は輸出に左右されたことを示している。

ところで取扱額をみると上海、香港をはじめ、天津、漢口、広州が拠点であった。このうち漢口は輸出港としても成長したが、天津、広州は国内市場の消費に支えられていたとみられる。

以上のことをふまえて開港場の特徴を整理すると以下のようになろう。

I 類型

中国の物流の拠点であって、各開港場に対して商品を生供給する位置にある。具体的には上海と香港がそれにあたる。取引をする相手は、中国全体におよんでいるが、上海は中国の中北部に、香港は南部の諸港と強い関係を持っている。特に外国商品を中国内へと中継する取引が目立ち、結果として両港の対国内貿易額は他の港を大きく上回っている。その一方で国内産品を輸出する窓口にもなったことから、国内産品の輸出先としても上位にある。

II 類型

上海、香港に次ぐ規模の港として、天津、漢口、広州があげられる。これらの港は上海や香港からもたらされた外国商品を国内に流通させる地域拠点としての役割をになった。しだいに対外直接貿易の額は増えるが、それでも19世紀において外国との直接貿易の割合はひくかった。天津、

表 2-2

1876年	(外国+国内)	外国商品	国内産品	1891年	(外国+国内)	外国商品	国内産品
上 海	37,602,536	3,951,291	33,651,245	上 海	58,388,960	16,296,409	42,092,551
香 港	18,208,927	509,730	17,699,197	天 津	32,064,856	15,179,789	16,885,067
漢 口	17,287,997	8,231,040	9,056,957	漢 口	28,573,727	14,225,502	14,348,225
天 津	17,157,715	7,569,141	9,588,574	香 港	26,379,749	895,989	25,483,760
汕 頭	11,756,138	7,792,043	3,964,095	広 州	25,404,994	12,543,463	12,861,531
鎮 江	10,365,432	7,865,102	2,500,330	汕 頭	16,457,518	8,728,033	7,729,485
広 州	9,789,621	4,705,410	5,084,211	鎮 江	13,592,413	6,999,136	6,593,277
寧 波	7,516,796	6,027,982	1,488,814	厦 門	10,181,051	4,533,252	5,647,799
福 州	7,279,248	3,223,332	4,055,916	牛 莊	8,989,777	5,673,813	3,315,964
厦 門	7,001,262	3,868,075	3,133,187	芝 罘	8,294,123	5,411,080	2,883,043
牛 莊	3,869,355	2,650,969	1,218,386	寧 波	7,477,160	5,558,640	1,918,520
芝 罘	3,793,336	2,293,577	1,499,759	福 州	5,204,871	3,537,512	1,667,359
九 江	3,046,131	2,317,461	728,670	宜 昌	5,071,091	3,152,812	1,918,279
打 狗	1,264,691	1,176,902	87,789	九 江	4,689,396	3,610,403	1,078,993
淡 水	1,224,320	1,044,886	179,434	蕪 湖	4,247,334	2,314,366	1,932,968
瓊 州	274,612	261,915	12,697	拱 北	3,286,126	3,009,748	276,378
合 計	157,438,117	63,488,856	93,949,261	淡 水	2,236,169	1,719,334	516,835
資料：海関統計 1891年の合計が合わないのは、その他の港への少額の輸出が含まれ、それが輸出先としては反映されていないため。				重 慶	1,598,504	1,357,652	240,852
				打 狗	1,533,696	1,351,543	182,153
				瓊 州	1,098,774	822,433	276,341
				温 州	399,032	306,217	92,815
				合 計	265,169,321	117,227,126	147,942,195

広州が外国商品取引が主であったのに対して、漢口は国内産品を一度集積して上海に送るという中継港の役割を果たしている。この上海と漢口を中軸とする中国内の取引関係は、19世紀末を通じて継続された。

Ⅲ類型

多くの開港場は上海や香港からの外国商品を受け入れつつ、その地域に産する特徴的な産品を輸出していた。その国内産品は対外貿易へとつながる場合もあったが、国内消費に向けられる産品もあった。たとえば牛莊の大豆、蕪湖の米などである。開港場は本来的に対外貿易との関係で論じられるものであるが、これらの諸港は国内流通の動向によっても成長が規定された。

Ⅳ類型

貿易額は比較的小額にとどまり、取引相手港も限られており貿易の拠点となった港の衛星港とも言えるものである。具体的には上海に対する温州、漢口に対する沙市などがあげられる。

さて海関統計では、外国商品と国内産品を区別して記載している。そして、時として国内流通の情報がそこに写り込んでいる。次にそういった情報について検討したい。

Ⅲ. 開港場の経済と国内経済

開港場を中心とする経済は、その成立の経緯からして対外貿易の動向に左右されたが、同時に在来交易の環境変化にも反応するものであった⁶⁾。清末には中国沿海部で長距離交易が展開したが、その中でも北部からの大豆粕と南部での砂糖生産とが関係する交易はよく知られたものである。こういった中国内での物資の異動は、海関統計にも反映されている。先に触れたように表1に表われる牛莊、芝罘と厦門、汕頭間にみられる結合度の強さは、この関係の具体的な表われである。

表1の結合度で目につく数値として、長江中流域にある蕪湖と南部との結合度の高さがある。蕪湖の輸出は国内産品がほとんどを占め、それによって各港と結ばれていた。具体的な内容は米輸出によるものである。ここで中国内の米流通を海関統計から追ってみると、米の消費地は天津、広州にある(表3)。ただし、天津への米には貢米が含まれており、単純に取引の結果とは言いきれない側面がある。ここで広東省の米取引の様子を見ると、広州では外国産米の増加も見られるものの、国内産米が多くを占めている(表4)。また汕頭では広州ほどではないが、やはり国内産米が多数をしめている(表5)。

一方、輸出港は上海、蕪湖また鎮江など長江下流域にあった。江蘇省西部にある鎮江の開港は1858年で、安徽省東部にある蕪湖は1877年開港である。海関統計では鎮江の米輸出が先んじていたが、やがて蕪湖にその地位をゆずることになる。この理由について海関報告は、蕪湖が産米地に近いこと、安徽米を鎮江まで輸送する途中にある南京で課税されること⁷⁾、さらに蕪湖に米をあつかう商人が増え、その競争が積極的な取引や組織化された売買方法に導いたとし⁸⁾、蕪湖において取引環境の向上があったことを理由としている。蕪湖の米の輸出は広州と汕頭商人によって占められ、1901年の段階で汕頭商人が10軒、広州商人が7軒におよんだ⁹⁾。その取引は自らの勘定で取引するほか、仲介商としても営業していたのである¹⁰⁾。蕪湖からの米はあるものは上海を経由して広州、汕頭へと搬出されたのであった。

米の輸出を左右する要素として海関報告が指摘するのは、産地それにもまして広東での作柄¹¹⁾そして規制である。米取引に対する規制は、清朝にとって経済政策の柱でもあった。そのために蕪湖の米取引も、その在り方で左右されたのであった。例えば日清戦争の際に蕪湖での米取引が禁止され、蕪湖の貿易は大きな影響を被っている。日清戦争の時期には、蕪湖で米輸出が規制さ

6) この点において、いわゆる「開港場経済圏」論では、対外貿易の進展が中国経済を再編した側面を強調しすぎている。

7) Returns of Trade and Trade Reports. Chinkiang 1882. p. 140.

8) Returns of Trade and Trade Reports. Wuhu 1885. p. 125.

9) Decennial Reports, 1892-1901. Wuhu p. 379.

10) 同上

11) Returns of Trade and Trade Reports. Wuhu. 1886. p. 128.

表 3 米国内流通

(単位 Picul)

(1876年)	輸 入	国内へ再輸出	国内へ輸出	(1891年)	輸 入	国内へ再輸出	国内へ輸出
牛 莊	1,986			牛 莊	35,236		
天 津	1,085,607			天 津	2,230,320		
芝 罘	59,974			芝 罘	140,254		
九 江	1,694			漢 口			19,722
鎮 江			243,253	蕪 湖			3,385,989
上 海	196,463	208,775	2,199,487	鎮 江	2,253		117,462
寧 波			21,470	上 海	261,012	356,363	1,923,530
福 州	228,002			寧 波	9,017		
打 狗	680		6,500	福 州	159,584		
廈 門	320,252	1,415	3,163	淡 水	44,635	27	
汕 頭	759,671			台 南		176	
広 州	544,764			厦 門	356,941	750	
				汕 頭	708,519	75	
				広 州	4,338,040	6	
	3,199,093	210,190	2,473,873				
					8,285,811	357,397	5,446,703

資料：海関統計

表 4 広州米取引

量 (単位: picul)		額 (単位: 海関両)		量 (単位: picul)		額 (単位: 海関両)	
年	国内米	外国米	国内米	外国米	年	国内米	外国米
1879	487,258	441	658,456	587	1890	1,572,692	5,632
1880	2,448,301	922	3,483,340	1,293	1891	4,338,039	389
1881	3,456,602	0	4,839,243	0	1892	3,977,644	204
1882	2,668,915	18,093	3,697,365	25,077	1893	1,513,440	404,146
1883	1,005,068	13,763	1,432,385	19,818	1894	2,928,256	142,305
1884	563,305	176	792,349	247	1895	3,506,482	589,924
1885	2,441,403	51,836	3,662,105	76,411	1896	2,705,047	212,787
1886	4,078,995	3,029	6,359,315	4,574	1897	1,647,742	796
1887	2,161,376	302	3,285,504	452	1898	679,598	7,502
1888	1,414,466	4,870	2,074,441	7,109	1899	1,314,448	44,002
1889	1,829,016	121	2,681,854	176			

資料：海関統計

表 5 汕頭米取引

量 (単位: picul)		額 (単位: 海関両)		量 (単位: picul)		額 (単位: 海関両)	
年	国内米	外国米	国内米	外国米	年	国内米	外国米
1879	364,615	108,040	678,545	148,863	1890	596,962	128,388
1880	468,406	22,901	774,095	31,437	1891	708,444	1,744
1881	1,132,745	78,036	1,710,384	98,245	1892	1,161,605	2,004
1882	764,675	80,683	1,123,828	99,228	1893	1,540,012	174,585
1883	214,112	70,254	344,963	80,177	1894	1,708,017	151,959
1884	158,872	77,934	230,234	113,005	1895	2,448,002	248,751
1885	432,726	72,958	670,726	95,763	1896	1,368,515	186,749
1886	1,142,682	81,957	1,949,072	153,513	1897	558,874	10,611
1887	804,822	112,970	1,295,876	149,293	1898	548,305	417,822
1888	481,200	31,727	736,616	38,167	1899	2,478,096	249,796
1889	632,088	16,182	1,090,230	21,169			

資料：海関統計

れる一方で鎮江では米取引が認められたため鎮江での取引は活況を呈した。その際には安徽商人が鎮江に会館をつくったものの、やがて蕪湖での取引が認められると、鎮江での会館の存在意義は薄れたのであった¹²⁾。

そして蕪湖における貿易額の変動について「この激しい変動の原因は、当港の主要部分である米にあり、その生産量と状況が大きく変動することによるものである」とされ¹³⁾ 蕪湖にとって米取引のあり方は全体の貿易の盛衰を決める要素であった。たとえば2年続きの豊作をうけた1899年の米取引では「農民たちは収穫物がよくはけて、その収入でこれまで考えたことが無いほどの生活上の快適さと満足そして贅沢さえ家族に与えることができ、米を搬出し必需品を持って来て販売する仲買商たちは、活発で利益の多い取引をおこない、多数のいやしくはあるが交易に欠くことのできない苦力や水夫たちは、ありあまる仕事を得て大量に輸入されているアヘンを買う金を稼いだのである。」¹⁴⁾と米輸出の利益が均霑する様を伝えている。「西洋の衝撃」的観点すれば、外国商品と国内産品とは対抗的な関係にあった。しかし、両者の取引結果は相互補完的であり、杉原薫氏のアジア経済圏の言葉をひけば「最終需要」が拡大するなかで、機会はいずれにも開かれていたのである。

スキナーは中心立地論にもとづいて中国の市場圏を議論した¹⁵⁾。そして、最終的には8つの巨視的地域を提起している。スキナーの示すように中国が複数の自立的経済圏によってなりたっているという認識は共有されていると考える。そうした時に、上記のような性格の異なった港がありなす関係は、スキナー的な下から積み上げられた市場圏とは別の姿を予想させる。もちろん、スキナー的な世界にあっても、全体を覆うような経済関係も想定しうる。たとえば、米穀市場もそうであろう¹⁶⁾。しかし、開港による経済機会の拡大はより強力に地域間を結ぶことになった。それでも、末端市場までを一つの論理で再編成しうるものではなく、既存の取引関係に乗るかたちでの接合が行われた。つまり、スキナーの巨視的地域の議論は多峰性を持つものであるが、対外貿易はそこに上海、香港に集約する双峰性と新しい序列を、あたかも冠雪のように持ちこんだのである。概念図として示せば図2のようになる。

おわりに

中国と世界経済との関係について、世界市場と出合ったことで新たな経済機会が生まれ、それに導かれるかたちで中華帝国の秩序は変容していくとの理解がある。黒田明伸氏が提起した開港

12) Decennial Reports, 1892-1901. Chinkiang p. 462.

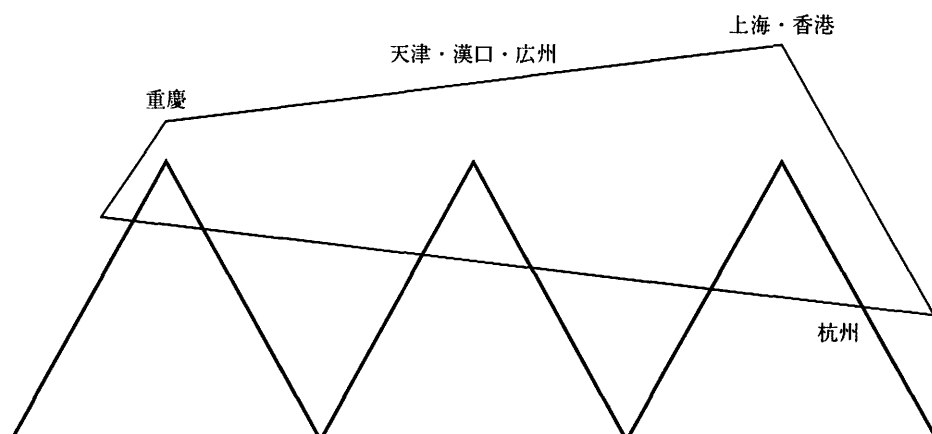
13) Decennial Reports, 1892-1901. Wuhu p. 371.

14) Return of Trade and Trade Reports, Wuhu 1899 p. 215.

15) Skinner. G. W. (ed.) *The City in Late Imperial China*. Stanford Univ. Press. 1977.

16) 山本氏は全国市場について斯波義信氏の研究をひいて宋代には清代と同様の全国的流通網が完成していたとしつつ、明代には綿布が純然たる市場向け商品として全国規模の流通を示したとの見方を示唆している。山本前掲『清代の市場構造と経済政策』(17頁)

図 2



場経済圏は、かつての帝国主義による規定をうけた中国経済という一面的な議論を克服しつつ、なお世界経済との出会いによって変化してゆく中国を描きだしたものである。それは単にモノのやりとりだけを扱うのではなく、村松祐次が問題にした中国社会論¹⁷⁾あるいは権力論へとつながるような点に含意があった。その意味で、本稿のような数字をもととする「開港場経済圏」の取り上げ方は十分でないと言える。しかし、モノのやりとりに限ってみても、開港場を中心とする経済には多様な要素が交錯していた。開港場の経済は中国経済に働きかけるだけでなく、在来 of 交易関係に依拠しそれに大いに左右もされたのである。

(受付 2012年11月5日)

17) 村松祐次『中国経済の社会態制』（東洋経済新報社 1949年 1975年復刊）